

シンポジウム特集

福澤諭吉と文明開化

杉山 伸也

はじめに：福澤の思想

福澤諭吉は、天保5年12月（1835年1月）に大坂の中津藩蔵屋敷で下級藩士の次男として生まれ、1901（明治34）年2月に66歳の生涯をとじた。自伝文学の傑作のひとつといわれる『福翁自伝』は、1897年11月頃から翌98年5月におこなわれた口述筆記の原稿に、福澤が大幅に加筆・訂正の手をくわえたもので、98年から99年にかけて『時事新報』に連載された。内容的には1880年頃までの福澤の前半生が中心で、誇張、記憶違いや誤記の箇所も散見されるものの、福澤の思想形成のプロセスを考察するうえで史料的にも価値が高い。

福澤の著書目録を概観すると、福澤みずから「維新前後は私が著書翻訳に勉めた時代」⁽¹⁾と語っているように、1880年前後を境として抽象的なタイトルから特定の具体的なテーマに変化していることがわかる。松沢弘陽は、福澤の思想が1879年から82年頃にかけて大きく変化していることを指摘し⁽²⁾、また福澤自身も、明治維新以降15年の自分の思想を振り返って、初段の「掃除破壊の主義」と第2段の「建置経営の主義」の2段にわけている⁽³⁾が、ほぼこの時期を境に、前期福澤と後期福澤の2つの時期にわけることができる。前期福澤は、慶應義塾における教育と翻訳および著作を中心に西洋文明の輸入・紹介に努めた啓蒙思想家・教育者としての時代であり、後期福澤は、慶應義塾の経営と『時事新報』（1882年創刊）の経営にたずさわるとともに、同紙に拠って政治的時事評論を展開した時代である。

福澤の思想史的理解をむずかしくしているのは、1860～70年代の前期福澤と80年代以降の後期福澤の思想を統一的に理解しようとするところにあるが、この2つの福澤の思想の流れは別系統のものと考え方が理解しやすい。第1は、啓蒙思想家としての前期福澤であり、『西洋事情』から『学問のすゝめ』『文明論之概略』を経て、『民情一新』に結実していく流れで、文明論を主要なテーマにして原理論的性格がつよく、福澤の思想的な中核を形成している。第2は、『分権論』（77年11月）から『通俗民権論』および『通俗国権論』（78年9月）、『国会論』（79年8月）、『時事小言』（81年9月）へとつづく後期福澤に相応する一連の著作で、明治日本の歴史的現実を直視して政治的な時事評論に軸足を移して、政治の「診察医」として現実的政策論を展開する時代である⁽⁴⁾。

前期福澤は、啓蒙思想家・教育家として一般庶民から学生や知識人、さらに「儒教流の故老」

- 1 『福翁自伝』245頁。以下、『福翁自伝』は、松沢弘陽校注『福澤諭吉集』（新日本古典文学大系 明治編10）岩波書店、2011年を利用した。なお、福澤の著作の初期版本55タイトル、全119冊に関しては、慶應義塾大学メディアセンター・デジタルコレクション「デジタルで読む福澤諭吉」で全文検索が可能である。杉山伸也「デジタルで読む福澤諭吉」福澤諭吉協会『福澤手帖』138号（2008年9月）を参照。
- 2 松沢弘陽『日本政治思想』放送大学教育振興会、1989年、39頁。
- 3 [掃除破壊と建置経営]（1883年？）『福澤諭吉全集』（以下『全集』と略）第20巻、岩波書店、248頁。ただし、この論稿は未完の草稿であるために初段と第2段の具体的な区切りの時期や内容については判断としないが、初段はほぼ前期福澤の時期に相応する。

『文明論之概略』にいたるまで幅広い読者層を対象に、福澤自身が対象に応じてフットワークよくスタンスを移動させて議論を展開し、啓蒙という観点からも俗文俗語主義の比較的ストレートでわかりやすい表現が多く用いられている。それに対して、後期福澤のスタンスは、主に『時事新報』に固定され、従来の新聞とは異なり、脱政党の立場から政治・経済・社会を広く論じ、読者層も慶應義塾出身者を主とする知識人や士族層に限定されている。したがって、後期福澤の議論は、読者層の関心をひくために、状況に応じて、「生の表現」ではなく「演技」⁽⁵⁾、あるいは「詭弁」、「華麗な殺し文句」や「華麗なレトリック」が駆使されている⁽⁶⁾。それは、「自由の気風は唯多事争論の間に在りて存する」⁽⁷⁾と考える福澤にとって、近代的情報ツールである新聞・雑誌などのメディアを積極的に利用したことにもよる。

「自由」「平等」「独立」「通義（権利）」など福澤の中核をなす思想は、洋書の翻訳を通じて得られた西洋思想に多くを負っているとはいうものの、福澤の思想的中核を形成するまでに十分に消化されている。後期福澤の思想的スタンスに「転向」といわれるほどの大きな揺らぎや変化はみられなかったが、福澤自身が強調する「時代（時節）と場所」によって表現の仕方や読者の反応が異なることもすくなくなかった⁽⁸⁾。とくに後期福澤においては、日本が内外ともに危機的な状況にあるという認識のもとに、「今」という時点で、具体的な状況に即して想定される選択肢のなかから「コンディショナルグード」⁽⁹⁾な選択を強いられることになる。後期福澤には、相矛盾する言説も多くみられ、徳富蘇峰も福澤の議論を「臨機応変」「对症下药」と評している⁽¹⁰⁾が、それは「時代と場所」に関係する問題で、状況に応じて福澤の認識も変化するので、福澤にとって時事評論の思想的な整合性や論理的一貫性などは重要な問題ではなかった⁽¹¹⁾。

福澤が「文明開化」という語彙をはじめて使用したのは、1868（慶応4）年に出版された『西洋事情外編』巻之一において、英語の“civilisation”に「文明」あるいは「文明開化」の訳語をあてているのが最初であると思われる⁽¹²⁾。本稿では、1880年前後までの啓蒙思想家としての前期福澤の思想形成の展開を、福澤の「文明」観あるいは「文明開化」理解の変容との関係を中心に考察する。

-
- 4 こうした福澤の議論の重心の移行は、『分離論』の「万世の理論」と「今日の権論」、あるいは「覚書」（1875年9月～78年5月頃）の「ゼネラルプリンシプル」と「パーチキュラルデテール」に相応する（『全集』第4巻、233頁、および第7巻、668頁）。
 - 5 丸山眞男（松沢弘陽編）『福沢諭吉の哲学』岩波文庫、2001年、192～193、203頁、および丸山「福沢・岡倉・内村」『忠誠と反逆』筑摩書房、1992年、280～281頁。
 - 6 坂野潤治「解説」『福澤諭吉選集』第7巻、岩波書店、1981年、326、336頁。
 - 7 『文明論之概略』第2章『全集』第4巻、24頁。
 - 8 『文明論之概略』第7章『全集』第4巻、115、131頁。その意味で、発表を前提として書かれなかった『丁丑公論』（1877年稿、1901刊）、「辛巳記事」（1881年稿）、『瘦我慢の説』（1891年稿、1901刊）には福澤の感情がそのまま表れていると考えられる。
 - 9 「覚書」『全集』第7巻、673頁。
 - 10 松本三之介『明治精神の構造』岩波現代文庫、2012年、34～35頁。
 - 11 福澤の「状況的思考」については、丸山『福沢諭吉の哲学』119頁などを参照。たとえば、福澤は、明治初期には内地雑居に反対していたが、1887年頃には人智の進歩や国情の変化を理由に賛成に転じている。
 - 12 『西洋事情外編』『全集』第1巻、394、395頁。

1 福澤諭吉の西洋体験

(1) 蘭学から英学へ

福澤の西洋体験は、1854（安政元）年に兄三之助の供をして長崎に遊学し、蘭学を学んだことにはじまる。翌55年、福澤は長崎を離れて江戸に向かう途上、兄三之助の勧めで大坂の緒方洪庵の適塾に入門し、本格的な蘭学修業を開始した。翌年兄の死去にともなって故郷の中津に戻り、家督を相続したが、洋学への想いは捨てがたく、ふたたび上坂して緒方塾に再入塾した。適塾では医学、物理学、化学などの原書を読み、自然科学に関する限り、当時の最先端の基本的知識を習得した。

この頃までに、徳川社会の封建的門閥制度とその理論的基礎となっている儒学に対する批判と、蘭学を通じた開国主義、いいかえれば反鎖国主義・反攘夷主義という福澤の基本的な立場は鮮明になっていた。福澤が適塾において物理学など理系の学問の基礎訓練をうけたことは、虚学としての儒学に対する批判とともに、福澤の事物に対する科学的あるいは相対的なアプローチ、いいかえれば「実学」^{サイヤンス}的な思考方法の形成に大きな影響をおよぼした⁽¹³⁾。

1858（安政5）年、福澤は藩命により江戸に出府し、築地鉄砲洲の中津藩中屋敷内で蘭学塾をひらいた。翌59年に安政の五カ国条約にもとづいて横浜が開港されると、福澤は早速「横浜見物」にでかけたが、これが蘭学から英学に転向する決定的な転機となった。

横浜に見物に……行て見た所が一寸とも言葉が通じない……今まで数年の間死物狂ひになつて和蘭の書を読むことを勉強した、その勉強したものが今は何にもならない 商売人の看板を見ても読むことが出来ない 左りとは誠に詰らぬ事をしたわいと実に落胆して仕舞た……此後は英語が必要になるに違ひない 洋学者として英語を知らなければ逆も何にも通ずることが出来ない この後は英語を読むより外に仕方がないと 横浜から帰た翌日だ、一度は落胆したが同時に又新に志を發して 夫れから以来は一切万事英語と覚悟を極めて…⁽¹⁴⁾

横浜から戻ると、福澤は英語学習の教授先を探したもののみつかることができず、最終的には中津藩にホルトロップの英蘭対訳辞書を購入してもらい、独学で英語の学習に取り組んだ。一度は落胆した福澤ではあったが、「真実に蘭学を棄て、仕舞ひ数年勉強の結果を空うして、生涯二度の艱難辛苦と思ひしは大間違の話で……蘭書を読む力は自から英書にも適用して決して無益でない……全く別のやうに考へたのは一時の迷であつた」⁽¹⁵⁾と蘭学の修業が無駄ではなかったことをのちに述懐している。

(2) はじめての渡米

福澤は、幕末期に3度の欧米体験をしている。最初の海外渡航は、1860（万延元）年1月、日米修好通商条約批准書交換使節団とともに派遣された咸臨丸の航海であった。福澤は、知人の

13 丸山眞男「福沢に於ける「実学」の転回」『福沢諭吉の哲学』所収。福澤は、「東洋の儒教主義と西洋の文明主義と比較して見るに、東洋になきものは有形に於て数理学と無形に於て独立心と此二点である」と述べている（『福翁自伝』243頁）。福澤は、「実学」が「実際に役に立つ学問」「実用の学問」と誤って解釈されるようになったことに気付いたためか、1883年の「慶應義塾紀事」において「実学」に「サイヤンス」というルビを付している（『全集』第19巻、415頁）。

14 『福翁自伝』114～116頁。

15 『福翁自伝』121頁。

桂川甫周を介して軍艦奉行木村撰津守の従者として渡米し、約3週間サンフランシスコに滞在したのち、ハワイを経由して5月に帰国した⁽¹⁶⁾。当時のサンフランシスコは、人口6万人余を有する港町で、鉄道はまだ敷設されていなかった。福澤が「理学上の事に就ては少しも肝を潰すと云ふことはなかつたが一方の社会上の事に就ては全く方角が付かなかつた」⁽¹⁷⁾と語っているように、福澤は「社会上政治上経済上の事は一向分らなかつた」ものの、市街地や人々の生活、咸臨丸修理のためのドライ・ドックなどに関心をよせ、また「鉄の多い」ことに気づき、「鉄は丸で塵埃同様に棄て、あるので どうも不思議だと思ふた」という。サンフランシスコ訪問の大きな成果は、ウェブスターの辞書とともに、『華英通詞』の原本を購入し、帰国後、同年8月に発音の読み仮名と訳をつけた『増訂華英通語』を刊行した。

福澤は、帰国後、幕府外国方御書翰掛翻訳方に雇用され、米国公使館通訳ヒュースケンの暗殺や水戸浪士による英国公使館襲撃などに関する外交書簡の翻訳にたずさわり、幕府がおかれている緊迫した国際関係と急進的攘夷論者の行動の影響を如実に感じ、しだいに政治的にも無関心ではいられなくなった。

(3) 文久遣欧使節団

1861(文久元)年末、幕府は、江戸・大坂の開市および新潟・兵庫の開港の延期交渉と欧州諸国の「事情探索」のために、竹内下野守を正使とする遣欧使節団を派遣することになった。福澤はこの使節団に翻訳方として随行し、約1年にわたり、フランス、イギリス、オランダ、ドイツ、ロシア、ポルトガルの計6ヵ国を訪問した。

福澤は、「此時にはモウ英書を読み英語を語ると云ふことが徐々出来て」いた⁽¹⁸⁾が、福澤はこの西欧行と『西洋事情』執筆の背景について、つぎのように述べている。

私の欧羅巴巡回中の胸算は 凡そ書籍上で調べられる事は日本に居ても原書を読て分らぬ 処は字引を引て調べさへすれば分らぬ事はないが 外国の人に一番分り易い事で殆んど字引にも載せないと云ふやうな事が此方では一番六かしい、だから原書を調べてソレで分らないと云ふ事だけを此逗留中に調べて置きたいものだと思て 其方向で以て是れは相当の人だと思へば其人に就て調べると云ふことに力を尽して 聞くに従て一寸々々……記して置て 夫れから日本に帰てから ソレを台にして尚ほ色々な原書を調べ又記憶する所を綴合せて 西洋事情と云ふものが出来ました 凡そ理化学 器械学の事に於て 或はエレクトルの事、蒸汽の事、印刷の事、諸工業製作の事などは必ずしも一々聞かなくても宜しいと云ふのは元来私が専門学者ではなし 聞たところが真実深い意味の分る訳けはない唯一通りの話を聞くばかり、一通りの事なら自分で原書を調べて容易に分るからコンナ事の詮索は先づ二の次にして 外に知りたいことが沢山ある。⁽¹⁹⁾

福澤の西洋諸国における訪問先や見聞録は『西航記』や「西航手帳」に詳しく記されているが、この福澤の西欧体験は、ヨーロッパ諸国の「事物調査」と同時に、欧州への往復路に寄港した香港、シンガポール、セイロンなどアジアのイギリスの植民地における西洋人の尊大な態

16 このときの咸臨丸の艦長が勝海舟で、のちに福澤が『瘦我慢の説』において批判することになる。

17 『福翁自伝』136～137頁、[万延元年アメリカハワイ見聞報告書]『全集』第19巻、3～5頁。のちに福澤は、『民情一新』において、「鉄は文明開化の塊なり」と述べている(『全集』第5巻、8頁)。

18 『福翁自伝』146頁。

19 『福翁自伝』154頁。

度とアジア人の卑屈（固陋）さの現状を認識する契機となり、その意味で福澤の西洋体験は同時にアジア体験でもあった⁽²⁰⁾。そこで福澤が肌で実感したのは、西欧諸国による「外圧」と植民地化に対するつよい危機感であり、それ故にこそ日本の国家的独立の必要性が繰り返し強調されることになった。

福澤は、幕府から手当として支給された400両のうち、出立前に母親に送った残額をロンドンでの書籍の購入費にあて、『西洋事情』の種本となるチェインバース社叢書をはじめとする教科書などの入門書類やレファレンス類などを購入した。

福澤の滞欧中の1862（文久2）年8月に生麦事件が起き、12月に帰国すると、日本では攘夷論が高揚していた。帰国後の福澤は、生麦事件に関するイギリスと幕府との賠償問題など外交機密の往復書簡の翻訳に従事し、薩英戦争や四国連合艦隊下関砲撃事件など幕府がおかれている緊張した国際関係を実感せざるをえなかった。攘夷運動の高揚にともない、洋学者も攘夷派浪士による殺戮の対象となり、福澤は危険を感じて「専ら著書翻訳の事を始めた」⁽²¹⁾。1864（元治元）年に福澤は、外国奉行支配調役次席翻訳御用として150俵取りの直参となり、公務のかたわら横浜居留地で発行されていた週刊英字新聞『ジャパン・ヘラルド』を翻訳して佐賀藩や仙台藩などの江戸留守居役から報酬を得て、中津から連れてきた小幡篤次郎など塾生の費用にあてた。こうして福澤は著書・翻訳に集中するようになり、「凡そ文久年間から明治五六年まで十三年の間と云ふものは夜分外出したことはない 其間の仕事は何だと云ふと唯著書翻訳にのみ屈託して歳月を送て居ました」⁽²²⁾という。

2 西洋文明の輸入・紹介：〈翻訳の時代〉

(1) 『西洋事情』の執筆

『西洋事情』は、福澤の〈翻訳の時代〉の典型的な著作である。福澤は、1866（慶応2）年3月に公務の暇をぬって『西洋事情初編』の執筆を開始し、6月下旬に脱稿し、同年に初編3冊、ついで67年に外編3冊、さらに70年に二編4冊の計10冊を刊行した。福澤が1862年末に欧州から帰国して以降、執筆までに4年余を要していることから、富田正文は、国内における攘夷運動の高揚など出版を躊躇させる何らかの事情があったと推察している⁽²³⁾。『西洋事情』は、平易な文章で淡々と書き進められており、初編は偽版もふくめると20～25万部の一大ベストセラーになった⁽²⁴⁾。

福澤はのちに「吾々洋学者流の目的は、唯西洋の事実を明にして日本国民の変通を促がし、一日も早く文明開化の門に入らしめんするの一事のみ」⁽²⁵⁾と述べているが、福澤は、「胸に落る」までの徹底的した調査⁽²⁶⁾や、チェインバース社叢書をはじめマカロックやリップピンコットの地理書などの入門書やレファレンス類、ミッチェルの『学校地理』やコーネルの『高校地理』の翻訳にもとづいて、『西洋事情』を書き上げた⁽²⁷⁾。『西洋事情』は、西洋社会の最新事情を

20 この点については、松沢弘陽『近代日本の形成と西洋経験』岩波書店、1993年を参照。

21 『福翁自伝』163頁。

22 『福翁自伝』188頁。

23 『西洋事情初編』『全集』第1巻、285～286頁。富田正文「後記」『全集』第1巻、621頁、および富田正文『考証福澤諭吉』上、岩波書店、1992年、263頁。

24 『福澤全集緒言』（1897年）『全集』第1巻、26頁。

25 『福澤全集緒言』『全集』第1巻、23頁。

26 『福翁自伝』155頁。

27 アルバート・クレイグ『文明と啓蒙：初期福澤諭吉の思想』慶應義塾大学出版会、2009年、58～59頁。

客観的に記述した唯一の概説書で、「恰も無鳥里の蝙蝠、無学社会の指南にして」⁽²⁸⁾、明治政府が新政令の制定に際して本書を参考にしたとしても不思議なことではなかった。

『西洋事情初編』において、福澤は、「経国の本」は、「文学技芸」にではなく、「政治風俗」にあるとして、各国の個別史を論述するに先立って、「西洋一般普通の制度風俗」について検討する。福澤は、「政治」からはじめ、「文明の政治」の6条件として「自主任意」、信教、技術文学、教育、政治の保任、貧民救済をあげ、第1条の「自主任意」では、「国法寛にして人を束縛せず、人々自から其所好を為し……毫も他人の自由を妨げずして、天稟の才力を伸べしむるを趣旨とす」⁽²⁹⁾と指摘し、以下、収税法、国債、紙幣、商人会社、外国交際（外交）、兵制、文学技術、学校、新聞紙、病院、文庫（図書館）・博物館・博覧会、病院、貧院・啞院・盲院・癩院・痴児院、最後に蒸気機関、蒸気船、蒸気車、電信機、瓦斯燈の23項目について簡潔に紹介している。これらの項目は『西航記』における福澤の訪問先とも一致しており、福澤が渡欧の時点で、渡米経験や原書を通じて近代の西洋社会の核心を的確に把握し、日本の未来像を描いていたことをうかがわせる。『初編』巻之二および巻之三では、アメリカ合衆国、オランダ、イギリスの歴史、政治、軍備、財政について紹介し、福澤が各国訪問の記憶と重ね合わせて、あらためて西洋認識を確認したことは疑いがない。



図：『西洋事情初編』（口絵）1866年

28 『福澤全集緒言』『全集』第1巻、29頁。

29 『西洋事情初編』『全集』第1巻、285、290頁。

『西洋事情初編』の口絵には、上段に「蒸氣濟人電気伝信」（蒸氣人を^{たす}助け、電気信を^{たよ}伝う）というフレーズを掲げ、北極からみた北半球の大陸部を中心とする地球の周囲に16本の電柱を立てて電信線でリンクを張り、その電信上を洋装の飛脚が走る姿が描かれている。また右には尖塔のある都市、左には気球が配置され、下段には蒸気船と蒸気機関車が描かれている。これは、まさに福澤が実体験した西洋文明の「外形」を端的に表現したもので、のちに福澤が『文明論之概略』において言及する文明の「無形」の「精神」を見透すまでにはいたっていないものの、近代の西洋が「蒸気の時代」であり、福澤がはやい時期から時代の起動力として蒸気と電信、いかえれば産業と通信の技術革新について注目していたことは、のちの『民情一新』において文明の利器として理論的にも位置づけられることになる。

(2) 再度の渡米と『西洋事情外編』

福澤は、1867（慶応3）年1月に勘定吟味役小野友五郎を委員長とする幕府の軍艦購入遣米使節団に翻訳方として随行し、2度目の渡米の途についた。万延元年の最初の渡米はサンフランシスコ訪問だけに終わったが、今回はパナマ経由でニューヨーク、ワシントンなど東海岸を中心に訪問し、同年6月に帰国した。福澤は、渡米中に慶應義塾や仙台藩のために購入した大量の事典や教科書などの洋書をめぐって小野ら幕府委員と対立し、帰国後謹慎を命じられ、購入した洋書は差押えられた。福澤は、謹慎中生徒に教えるかたわら、『西洋旅案内』の執筆や翻訳に専念し、同年10月に謹慎を解かれ、ふたたび出仕することになった⁽³⁰⁾ものの、この2回目の渡米は、福澤にとって最終的に幕府に見切りをつける転機となった。

『西洋事情外編』は、内容的にも翻訳・翻案であり、そのまま福澤の思想とみなすことはできないが、そうした性格にもかかわらず、福澤の思想的な中核を形成する契機となる重要な著作であった。福澤は、帰国後、『西洋事情初編』の米英蘭の続編を書き進める計画をたてていたが、各国史を積み重ねても、西欧社会についての一般的な説明がないと、「柱礎屋壁の構成を知らずして、遽かに一家中の部曲を檢視するが如し」⁽³¹⁾と考え、計画を変更して、チェインバース社叢書『経済学』⁽³²⁾の前半部「ソサイヤル・エコノミー」の翻訳を中心に、フランシス・ウェイトランドの『経済学』の抄訳をくわえて、先に『西洋事情外編』として出版することにし、1867（慶応3）年冬に脱稿した。

このチェインバース社叢書の原本は、ジョン・バートンの『経済社会論』⁽³³⁾で、1年にわたるチェインバース兄弟の説得をうけて、バートンが1849年に同社から刊行したもので⁽³⁴⁾、アダム・スミスなどスコットランド啓蒙の流れを汲む古典派経済学の概説的入門書である。バートンの原著は、第1章の「労働」からはじまり経済学から社会経済一般におよぶ構成になっているが、叢書の刊行にあたって、チェインバース兄弟がバートンの著書に大幅に手をくわえて編集し直したらしく、福澤が『外編』の「題言」で指摘しているように、構成が入れ替えられて、前半部が「ソサイヤル・エコノミー」と後半部が「ポリチカル・エコノミー」となり、タイトルも『経済学』に変更された。

30 『福翁自伝』189～198頁。

31 『西洋事情外編』巻之一「題言」『全集』第1巻、385頁。

32 William and Robert Chambers (eds), *Chambers's Educational Course, Political Economy, for Use in Schools, and for Private Instruction*, London and Edinburgh: W. and R. Chambers, 1852.

33 John Hill Burton, *Political and Social Economy: Its Practical Applications*, Edinburgh: W. and R. Chambers, 1849. A・M・クレイグ「ジョン・ヒル・バートンと福澤論吉」（西川俊作訳）『福澤論吉年鑑』11号、1984年。

34 'Mr. Burton's Work on Political and Social Economy', *Chambers' Edinburgh Journal*, 3 February 1849.

福澤は、この『経済学』の前半部の「人間交際の学」、すなわち人間と社会（組織・制度・仕組み）の関係に関する権利、文明、国家、外交、政府、法律、教育などの章の大部分を訳出しているが、後半部の経済学に相当する部分は、経済の趣意と私有に関する冒頭の2章のみを訳出するにとどめ、原著にはない特許や著作権の項目を追加している。経済学に関する章の大部分が省略された理由について、福澤は、神田孝平がオランダ語訳から重訳したウィリアム・エリスの『経済小学（*Outline of Social Economy*）』と類似していることをあげているが、杉山忠平は、福澤が後半部の大半を意識的に除外し、翻訳部分のなかでも自然的自由とその予定調和を強調した部分を省略していると指摘し、またアルバート・クレイグは、福澤が西洋の諸制度に批判的な部分やヨーロッパの君主の悪評などの部分を割愛していると指摘している⁽³⁵⁾。

『西洋事情外編』について、福澤は1870年に『西洋事情二編』を刊行した。『二編』で、福澤はイギリスの法学者ブラックストンの『英法注解』のうち人間の権利に関する部分とウェイルランドの収税論の抄訳⁽³⁶⁾のほか、ロシアおよびフランスの計4冊を刊行し、ついでポルトガルおよびプロシアについて筆を進める計画であったが、実現の運びとはならなかった。

(3) 福澤と政治

福澤は、『福翁自伝』のなかで、明治維新に関連して「政治に関係しない」ことをことさらに強調し、また「私は政事の下戸」であり、「私は政治の事を軽く見て熱心でないのが政界に近づく原因」と述べ、自分は政治の「診察医」として「政治診断書」を書くことはできるが、「開業医」として「療治」することはできないし、「療治しやうとも思はず」、また「療治する腕もない」といっている⁽³⁷⁾。たしかに福澤は、政治家として活動することはなかったが、後期福澤の『時事新報』紙上における政治的発言や福澤の政局をめぐる行動から考えても、政治への関心がないというのは、あくまでも福澤のパフォーマンスにすぎない。

幕末期の1860年代に、福澤は幕府関係の外交文書の翻訳に従事していたので、幕府政治のみならず、欧米諸国の動向にも通じていた。福澤は、当初有力大名による「大名同盟」論を理想としていたが、幕府自身による幕政改革の可能性と尊攘運動の激化という状況のなかで、1866（慶応2）年7月に「西洋事情」の写本を添えて木村撰津守を通じて老中小笠原長行に「長州再征に関する建白書」を提出した⁽³⁸⁾。

この建白書のなかで、福澤は、外国の兵力を借りてでも、攘夷派の長州藩を壊滅させれば、異論のある大名も幕府支持に傾き、「此御一挙にて全日本国封建の御制度を御一変被遊候程の御威光相頭候様無御座候ては不相叶義に奉存候」と攘夷論の長州に対して強硬論を展開し、封建制度を廃止したうえで「大君之モナルキ」⁽³⁹⁾の確立をめざした。福澤は『西洋事情初編』において、「立君モナルキ」には、ロシアや清朝の「立君独裁デスポット」と欧州諸国の「立君定律コンスチテューショナル・モナルキ」の2様があることに言及している⁽⁴⁰⁾が、ここで福澤が意味しているのは文脈からみて後者である⁽⁴¹⁾。しかし、こうした福澤の政治への積極的な

35 伊藤正雄『福澤論吉論考』吉川弘文館、1969年、141～173頁、杉山忠平『明治啓蒙期の経済思想：福沢論吉を中心に』法政大学出版局、1986年、158～165、234～239頁、安西敏三「『西洋事情』における「文明」と「進歩」」『法学研究』（慶應義塾大学法学研究会）76巻12号（2003年12月）、228～239頁、アルバート・クレイグ「福沢論吉の歴史意識と文明開化」『三田評論』1985年4月号、40頁。

36 『西洋事情二編』「題言」『全集』第1巻、485頁。

37 『福翁自伝』201、357頁。

38 「長州再征に関する建白書」『全集』第20巻、10頁。

39 慶応2年11月7日付福澤英之助宛福澤論吉書簡『福澤論吉書簡集』第1巻、岩波書店、2001年、65頁。

40 『西洋事情初編』『全集』第1巻、289頁。

コミットメントも功を奏することなく、幕府は将軍家茂の死去を機に長州再征を打ち切ることになったために、福澤の幕府改革に対する淡い期待は挫折し、幕府政治に対する失望感がつよくなった。

第2回の遣米使節団では、福澤は幕臣でありながら公然と幕府を批判し、また洋書購入をめぐる幕府委員との対立から帰国後に謹慎処分をうけたことはさきにふれたが、福澤は、幕府が開国主義を装ってはいるものの、本質的に「門閥制度鎖国主義」であることに愛想を尽かし、同時に、勤王家は「幕府より尚ほ一層甚だしい攘夷論で」「国を滅す……乱暴人」であるとみなした。攘夷派が政権を掌握して新政府を樹立したことで、佐幕も反幕もともに福澤の支持するところではなく、福澤にとって第三の途を歩む以外の選択肢はなくなった⁽⁴²⁾。

福澤は、1868（慶応4）年に鉄砲洲の奥平邸が築地の外国人居留地になるのを機会に英学塾を芝新銭座に移転し、慶應義塾と命名した。ついで1871年に慶應義塾は三田に移転し、福澤の関心は慶應義塾における啓蒙教育と知識人の育成にそそがれることになった。

福澤が明治政府への出仕を2度にわたり固辞したのは、「明治政府は古風一天張りの攘夷政府と思込んで仕舞い、其内実は鎖攘の根性、信ずるに足らずと見縊た」からで、「政治は兎も角も之を成行に任せて 自分は自分にて聊か身に覚えたる洋学を後進生に教へ 又根気あらん限り著書翻訳の事を勉めて 万が一にも斯民を文明に導くの僥倖もあらんかと 便り少なくも独り身構へした」⁽⁴³⁾と述懐している。このように福澤が、明治政府を鎖国攘夷主義の延長線上に位置づけ、その開明性についての判断を誤ったことが、結果的に、福澤の在野における啓蒙思想家としての存在感を一層大きくしたといえる。

3 『学問のすゝめ』：〈翻訳の時代〉から〈著作の時代〉へ I

(1) 「一身独立一国独立」

福澤の〈翻訳の時代〉から〈著作の時代〉に移行する中間に位置するのが、『学問のすゝめ』全17編である。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり」という有名な文章ではじまる『学問のすゝめ』は、1872年2月の初編以降、75年11月の第17編にいたるまでの4年にわたり、福澤が「読書の余暇随時に記」した小編を合本にしたものである⁽⁴⁴⁾。福澤によると、この書は約70万冊が発行され、著作権も未確立であったために偽版も多数出版され、真偽両版を累計すると340万部が流布したという⁽⁴⁵⁾。『学問のすゝめ』は、各編ごとに主題も異なり、また対象とする読者層も異なるため、反復個所も多く、また体系性に欠けているが、福澤が重複して論じたテーマはのちに『文明論之概略』のなかであらためて整理されて展開されることになる。

『学問のすゝめ』は、『西洋事情外編』に訳出されたチェインバース社の『経済学』の議論に拠りながら、2編および6～8編はウェイランドの『道徳論』(*The Elements of Moral Science*)の翻訳・翻案である⁽⁴⁶⁾が、『西洋事情』とは異なり、完全な翻訳・翻案ではなく、随所に福澤自

41 松沢『近代日本の形成と西洋経験』196～198頁、および川崎勝「初期福澤論吉の政治意識の表白」寺崎修編『福澤論吉の思想と近代化構想』慶應義塾大学出版会、2008年。

42 『福翁自伝』211～218、348～349頁。

43 『福翁自伝』232～235頁。同書、349～352頁も参照。

44 『学問のすゝめ』「合本学問之勸序」(1880年7月)『全集』第3巻、23頁。

45 『福澤全集緒言』『全集』第1巻、38頁。

身の見解が大胆に吐露されている。なかでも4編「学者の職分を論ず」と5編「明治7年1月1日の詞」は、福澤自身が「学者を相手にして論を立てしもの」で、「民間の読本たる可き学問のすゝめの趣意を失」っていると述べている⁽⁴⁷⁾ように、ここには福澤の思想が明確に語られている。

『学問のすゝめ』における福澤の関心は、全体として人権の確立と一身一国の独立の維持という政治的課題から公德や社会道徳に移行している⁽⁴⁸⁾が、福澤における最大のテーマは、「一身独立一国独立」が繰り返し強調されていることから知られるように、日本の国家的独立と国民の自覚、^{ナショナル・アイデンティティ}いいかえれば国家意識の形成の必要性におかれていた。そして、そのために学問・教育が重要になる。

1870年代前半期のこの時点で、福澤が、「国は同等なる事」を論じたあとに、「外国に対して我国を守らんには自由独立の気風を全国に充満せしめ、国中の人々貴賤上下の別なく、其国を自分の身の上に引受け……各其国人たるの分を尽さざる可からず」⁽⁴⁹⁾と強調するにいたった背景には、1871年の台湾における宮古島島民遭難事件に端を発し、74年の台湾出兵など琉球帰属問題をめぐる清国との対立、朝鮮との国交交渉をめぐると日朝関係の緊迫化と国内の征韓論争、ロシアとの国境紛争など日本の国家的独立をめぐって対外的緊張感が高まり、福澤が「益我独立の薄弱なるを覚る」にいたったからと思われる⁽⁵⁰⁾。

福澤のこうした国家的独立についてのつよい危機感は、外交書簡の翻訳や欧米やアジアにおける渡航体験、さらに『西洋事情』の翻訳から得た欧米列強に関する最新の知識を通じて、福澤が日本の植民地化に対する危機を、政府の指導者層をふくむほかの日本人以上に敏感に感じとっていたことを推測させる。この背景には、満州族による中国の支配、インドや香港、シンガポールなどイギリスの植民地も意識されていたと思われる。

こうした国際関係のなかで福澤が強調したのは、「抑も明治年間の日本人にて、憂ふ可きものとは何ぞや。外国の交際、即ち是なり」⁽⁵¹⁾と述べているように、「外国交際」、すなわち外交関係の重要性である。福澤が、一貫して「国家独立」を強調し、「国権」が絶えず先行せざるをえなかったのは、こうした外圧に対する危機意識と「外国交際」の重要性を原体験として認識していたが故であり⁽⁵²⁾、そのための絶対的必要条件として「一身独立」の思想がでてくるのであって、決してその逆ではない。福澤は、つぎのように明確に述べている。

今一国内の人間交際は内の事なり、外国交際は外の事なり。内の交際は軽小にして外の交際は重大なり。内は忍ぶ可し、外は忍ぶ可らず。此の学問のすゝめ、初編より十一編に至るまで、文章も事柄も様々なれども、其大趣意として失はざる所は、上下同権、共に日本国を守て独立を保たんとするの一事に在るのみ。⁽⁵³⁾

46 富田『考証福澤論吉』上、394頁。

47 『学問のすゝめ』5編『全集』第3巻、57頁。

48 西川俊作「解説」『福澤論吉著作集』第3巻、慶應義塾大学出版会、2002年、262頁。

49 『学問のすゝめ』3編『全集』第3巻、44頁。

50 『学問のすゝめ』5編『全集』第3巻、58頁。

51 『福澤全集緒言』『全集』第1巻、43頁。

52 丸山眞男は、福澤において「国権」は「殆んど対外関係において使用」(傍点原文通り)され、しかも「国権」が終始「民権」に優先していたところに、福澤の「全体系のアキレス腱があった」と指摘している(『福沢論吉の哲学』125頁)が、19世紀後半期の国際関係のなかで、国家的独立が保障されないかぎり「民権」の存在する余地がないことは自明ではないだろうか。

53 「内は忍ぶ可し、外は忍ぶ可らず」(1874年?)『全集』第19巻、222頁。

(2) 「文明の精神」

『学問のすゝめ』5編において、福澤ははじめて「文明の精神」という語句を使用している。福澤によれば、「文明の精神」とは「人民独立の気力」というべきものであり、「文明の精神」は、西洋から学ぶべきものではなく、日本人みずからが創造していくべきものであることが知られる。しかし、「今日本の有様を見るに文明の形は進むに似たれども、文明の精神たる人民の気力は日に退歩に赴」いているのが現状である。

それでは、こうした「我国の人民に気力なき其原因」はどこに求められるのであろうか。それは、「日本には唯政府ありて未だ国民あらず」といわれるように、「恰も国は政府の私有にして、人民は国の食客たるが如し」であることによる。したがって、このような国家に対する国民の「客分」・「食客」意識という「卑屈不信の気風」を払拭して、「独立の気力」をもつためには国民的自覚、いいかえれば国民（国家）意識の形成が必要であると、福澤は主張する⁽⁵⁴⁾。ただし、この時点での福澤は、国民意識の形成の重要性を指摘するにとどまり、国民国家の形成と関連づけるようになるのは、フランソワ・ギゾーの『ヨーロッパ文明史』を読んで以降のことであった⁽⁵⁵⁾。

こうして「文明の精神」である「人民独立の気力」を養成するための教育機関をめぐって、政府と人民の職分論が登場する。福澤の政府観は、ウェイランドやJ・S・ミルなどに依拠した自由主義的な「小さな政府」論で、「政府は国民の名代にて、国民の思ふ所に従ひ事を為すものなり。其職分は罪ある者を取押へて罪なき者を保護するより外ならず」⁽⁵⁶⁾として、政府の機能は社会の安全と秩序の維持にあると考える。また「文明開化は政府の専有に非ず」⁽⁵⁷⁾、したがって「文明の事を行ふ者は私立の人民にして、其文明を護する者は政府なり」として、なかでも「文明を首唱して国の独立を維持す可き者」として、福澤は「ミツヅルカラッス」、すなわち知識人の役割に期待する⁽⁵⁸⁾。

4 『文明論之概略』：〈翻訳の時代〉から〈著作の時代〉へ II

(1) 『文明論之概略』の執筆

福澤にとって翻訳から著作へ最終的な転換点となったのが、福澤40歳の1875年8月に刊行された『文明論之概略』である。『文明論之概略』は、福澤の著作のなかでもっとも理論的体系性をもつ著作で、丸山眞男は「福沢思想についての…唯一の体系的原論」（傍点原文通り）、子安宣邦は「はっきりとした文明論的な日本の設計を最初に提示した書」と評している⁽⁵⁹⁾。

福澤は、1874年2月に荘田平五郎に宛てて、「私ハ最早翻訳ニ念ハ無之、当年ハ百事ヲ止メ読書勉強致候積リニ御座候……一年斗り学問する積なり」⁽⁶⁰⁾と認め、その直後の74年3月頃に『文

54 『学問のすゝめ』3～5編『全集』第3巻、44、45、50、52、58、59頁。富田正文『考証福澤諭吉』上、385～386頁、および牧原憲夫『客分と国民のあいだ』吉川弘文館、1998年、6～7、131頁。

55 松沢弘陽校注『文明論之概略』「解説」岩波文庫、1995年、381～383頁。

56 『学問のすゝめ』6編『全集』第3巻、63頁。

57 『福澤全集緒言』『全集』第1巻、62頁。

58 『学問のすゝめ』5編『全集』第3巻、61頁。

59 丸山眞男『『文明論之概略』を読む』下、岩波新書、1986年、313頁。子安宣邦『福澤諭吉『文明論之概略』精読』岩波現代文庫、2005年、2頁。子安の研究は、丸山の『『文明論之概略』を読む』を批判的に解読したもので、有用である。

『明論之概略』の執筆に取りかかり、9月には全巻を書き上げたあと、半年余にわたって改稿作業を重ね、75年3、4月頃に脱稿した。福澤は、本書の目的について、のちに当時の心境をつぎのように語っている。

従前の著訳は専ら西洋新事物の輸入と共に我国旧弊習の排斥を目的にして、云はゞ文明一節づゝの切売に異ならず。加之、明治七八年の頃に至りては世態漸く定まりて人の思案も漸く熟する時なれば、此時に当り西洋文明の概略を記して世人に示し、就中儒教流の故老に訴へて其賛成を得ることもあらんには最妙なりと思ひ、之を敵にせずして今は却て之を利用し之を味方にせんとの腹案を以て著したるは文明論之概略六卷なり。⁽⁶¹⁾

こうした福澤の内的思想の変化とともに、福澤が日本の文明的位置を明確にしなければならない背景には、ひきつづき日本の国家的独立を危うくする国際関係に対するつよい危機感があった。それは、日本の周囲においてロシアやイギリスが輻輳している現在、「此時に当て日本人の義務は唯この国体を保つの一箇条のみ。国体を保つとは自国の政権を失はざることなり。政権を失はざらんとするには人民の智力を進めざる可らず。……智力発生の道に於て第一着の急須は古習の惑溺を一掃して西洋に行はるゝ文明の精神を取るに在り」⁽⁶²⁾と主張する。

福澤が急ぐ理由は、国際関係における危機感にくわえて、国内において佐賀の乱をはじめ不平士族の反乱が頻発し、それと同時に自由民権運動が高揚したために、政府批判の不平民権家と守旧派の不平士族とが連携して国内紛争が生じる危険性が高まり、その結果、政府が専制化することを恐れたためであった。こうした明治政府と国民との対立がしだいに顕著になり、福澤は「此まゝに捨置くときは国家の不利これより大なるはなしと、独り心に感じ」、「凡そ明治十年」頃に、後期福澤につながる分権論、民権論、国権論など官民調和論を説くようになったと述懐している⁽⁶³⁾。

さらに、1873年7月に発足した明六社における福澤の立場は異質であったが、福澤が『学問のすゝめ』4編で「学者職分論」を唱え、洋学派知識人の政府出仕を批判したのに対して、加藤弘之、森有礼、津田真道、西周が反論し、『明六雑誌』上で学者職分論争が生じたこともひとつの要因になったと思われる。福澤は、当時ロンドンに留学していた馬場辰猪に宛てて、つぎのように書き送っている。

……方今日本ニ而兵乱既ニ治りたれとも、マインド之騒動ハ今尚止マズ。此後も益持続すへきの勢あり。古来未曾有之此好機会に乗し、旧習之惑溺を一掃して新ラシキエレメントを誘導し、民心之改革をいたし度。逆も今の有様ニ而ハ、外国交際之刺衝ニ堪不申。法の権も商の権も日ニ外人ニ犯され、遂ニハ如何ともすべからざるの場合ニ可至哉と、学者終身之患ハ唯この一事のミ。……民心之改革ハ政府独りの任ニあらず。苟も智見を有する者ハ、其任を分テ自から担当せざるべからず。結局我輩の目的ハ、我邦之ナシヨナリチを保

60 1874年2月23日付 庄田平五郎宛福澤論吉書簡『福澤論吉書簡集』第1巻、293頁。

61 『福澤全集緒言』『全集』第1巻、60頁。

62 『文明論之概略』第2章『全集』第4巻、32頁。

63 『福澤全集緒言』『全集』第1巻、63頁。石河幹明『福澤論吉伝』第3巻、岩波書店、1932年、6頁も参照。福澤が懸念したように、75年6月に政府は讒謗律および新聞紙条例による言論出版の統制を開始し、これを機として明六社の活動も解体することになった。福澤が官民調和論を主唱するようになった原点は、大久保利通、伊藤博文と会食した「明治七八年の頃」にあるとも述べている（『福澤全集緒言』『全集』第1巻、63頁）。

護するの赤心のミ。……日本之形勢誠ニ困難なり。……内を先ニすれば外の間ニ合はず。外に立向はんとすれば内のヤクザが袖を引き、此を顧ミ彼を思へば、何事も出来ず⁽⁶⁴⁾

福澤の関心は、日本を西洋諸国と対等の地位を有する「文明国」にすることで、その目的は「国の独立」であり、「今の我文明は此目的に達するの術なり」⁽⁶⁵⁾と述べているように、西洋文明はあくまでも日本の国家的独立のためのツールにすぎなかった。しかし、中国と同様に「半開」の位置にある日本にとって、「我国の文明の度は今正に自国の独立に就て心配するの地位に居り」⁽⁶⁶⁾、日本は、「今の時に当りて前に進まん歟、後に退かん歟、進みて文明を逐はん歟、退きて野蛮に返らん歟、唯進退の二字あるのみ」⁽⁶⁷⁾という重大な岐路に立っている。

福澤にとって国家的独立がいかに重要であったかは、『文明論之概略』の執筆プランの日付からも推測される。『文明論之概略』の最後の3章について、福澤はまず結論部の第10章「自国の独立を論ず」を書き、西洋文明との比較において日本とその文明を相対化するために、第8章「西洋文明の由来」と第9章「日本文明の由来」を、主にヘンリー・T・バックル『英国文明史』やギゾー『ヨーロッパ文明史』の英訳本で補強しながら論じた⁽⁶⁸⁾。バックルもギゾーとともに、ヨーロッパとアジアを対比してヨーロッパ文明の進歩性を説いているが、大きな相違は、バックルが自然環境の重要性を指摘したのに対して、ギゾーは歴史条件から説明していることである。したがって、アジアの停滞が「権力偏重」の「気風」にあると考える福澤が、バックルの自然決定論ではなく、変革の可能性を内包するギゾーに共感を覚えたこともうなずける⁽⁶⁹⁾。その意味で『文明論之概略』は、福澤が、西洋的啓蒙思想から訣別し、自分の言葉で表現する自立した思想を確立した記念碑的著作であった。

(2) 福澤の相対主義

こうして福澤は、日本の文明進歩のために、まず「文明論」を「始造」する必要があると考えた⁽⁷⁰⁾。それは同時に、福澤にとって、これまでの翻訳に依拠してきた思想の限界を認識することでもあり、執筆の「中途にて著述を廃し暫く原書を読み、又筆を執り又書を読み」⁽⁷¹⁾、原書の精読を通して知識を摂取・吸収し、自己の内部で思想化していく作業をつづけた。

福澤は、『文明論之概略』の第1章「議論の本位を定る事」において文明論を論じる際の方法論的基準として、軽重、長短、善悪、是非など相対的な価値判断の重要性を指摘する⁽⁷²⁾。そして「文明開化の字も亦相対したるものなり」として、ヨーロッパ諸国およびアメリカ合衆国を「最上の文明国」、トルコ、中国、日本などのアジア諸国を「半開の国」、アフリカおよびオーストラリアなどを「野蛮の国」と位置づけ、「人類の当に経過す可き階級」あるいは「文明の齢」であるという進歩史観に立って、西欧文明を「一国文明の進歩を謀る」基準にして、各国の歴

64 1874年10月12日付馬場辰猪宛福澤論吉書簡『福澤論吉書簡集』第1巻、312～313頁。

65 『文明論之概略』第10章『全集』第4巻、209頁。

66 『文明論之概略』第10章『全集』第4巻、183頁。

67 『文明論之概略』第1章『全集』第4巻、16頁。

68 『文明論之概略』の第2、3、8章はギゾー、第4～7、9章はバックルの影響が顕著にみられるという（神山四郎「解説」『福澤論吉選集』第4巻、岩波書店、1981年、333～334、340頁、および中井信彦・戸沢行夫「『文明論之概略』の自筆草稿について」『福澤論吉年鑑』2号、1975年）。

69 松沢『近代日本の形成と西洋経験』319～331頁。

70 「文明論之概略緒言」『全集』第4巻、1～2頁。松沢『近代日本の形成と西洋経験』307～349頁。

71 1875年4月24日付島津復生宛福澤論吉書簡『福澤論吉書簡集』第1巻、320頁。

72 『文明論之概略』第1章『全集』第4巻、9頁。

史を相対化していく⁽⁷³⁾。しかし、ここで福澤の歴史アプローチが、単線的な進歩史観ではなく、各国に応じた多様性を容認する視点を内包していたことは注目に値する。こうした西欧・アジア・日本の比較の視点は、ギゾーをはじめとする歴史書の翻訳・翻案の過程で培われたと思われるが、福澤は、洋書の知識を日本の文脈に応じて取捨選択しながら摂取・消化し、自己の内部で思想化して独自の見解を構築していった。このように福澤は、西洋文明の推進者であったが、たえず比較の視点を失わず、西欧文明を絶対化することはなかった。

(3) 福澤の文明論

前述したように『学問のすゝめ』においては、「文明の精神」は「人民独立の気力」と定義されていたが、『文明論之概略』になると、ニュアンスに若干変化が生じ、「人民の気風」「国俗又は国論」「一国の人心風俗」を意味するようになった⁽⁷⁴⁾。

福澤によると、文明には「事物」を意味する「外形」と「無形」の「精神」の2様がある。文明の「精神」とは「内に存する精神」のことで、「人民の気風」あるいは「人心風俗」をさす。文明の「外形」を導入することは容易であるが、文明の「精神」を求めることはむずかしいので、先に「精神」を準備し、「外形」は後にすべきであって、この順序を誤ると「却て害を為すこと多し」⁽⁷⁵⁾と述べ、福澤は明治初期の「外形」の西洋化の現実を暗に批判する。

それでは、文明とはなにかといえば、福澤は、「文明とは結局、人の智徳の進歩」⁽⁷⁶⁾であり、「文明論とは人の精神発達の議論なり。其趣意は一人の精神発達を論ずるに非ず、天下衆人の精神発達を一体に集めて、其一体の発達を論ずるものなり。故に文明論、或は之を衆心発達論と云ふも可なり」⁽⁷⁷⁾と述べ、文明は、個人のレベルの問題ではなく、集合としての国民全体の問題であると理解するようになる。

つぎに「智徳の進歩」とはなにかについて、福澤は、つぎのように定義する。

徳とは徳義と云ふことにて、西洋の語にて「モラル」と云ふ。「モラル」とは心の行儀と云ふことなり。……智とは智恵と云ふことにて、西洋の語にて「インテレクト」と云ふ。事物を考へ事物を解し事物を合点する働きなり。⁽⁷⁸⁾

丸山眞男は、ここで徳の不変性と智の進歩性を対照させ、福澤がバッケルの影響をうけて「徳」よりも「智」に重心をおいているという⁽⁷⁹⁾。

こうして、日本の国家的独立という目的達成のためには、西洋の技術文明を導入して日本を文明化することが必要であるが、日本においては、「政府は新旧交代すれども、国勢は変ずる

73 『文明論之概略』第2章『全集』第4巻、16、17、19頁。

74 『文明論之概略』第2章『全集』第4巻、20頁。

75 『文明論之概略』第2章『全集』第4巻、19～21頁。「有形」と「無形」については、たとえば「無形の学問」と「有形の学問」(『学問のすゝめ』2編)、「有形の独立」と「無形の独立」(『学問のすゝめ』16編『全集』第3巻、131頁、および『福翁百余話』『全集』第6巻、391～392頁)、また「外国交際の「有形の結果」と「無形の結果」(「外国人の内地雑居許す可らざるの論」1875年1月『全集』第19巻、518頁)など諸所において比較対照させて論じられている。

76 『文明論之概略』第3章『全集』第4巻、41頁。

77 『文明論之概略』緒言『全集』第4巻、3頁。

78 『文明論之概略』第6章『全集』第4巻、83頁。『民情一新』(第3章)においては、「智とは……英語にて云へば「インフォルメーション」の義に解して可ならん」としている(『全集』第5巻、26頁)。

79 丸山『『文明論之概略』を読む』上、229頁。「智」「徳」については、西村稔『福澤諭吉：国家理性と文明の道徳』名古屋大学出版会、2006年、第4章も参照。

ことな」く、また「日本国の歴史はなくして日本政府の歴史あるのみ」で、「日本には政府ありて国民（ネーション）なし」という状況である。その原因は、「権力の偏重」によって民心が停滞し、文明の発達が阻害されていることにある⁽⁸⁰⁾ので、したがって、日本の国家的独立をはかるためには、「マインド」、すなわち「民心之改革」が必要になる⁽⁸¹⁾。

おわりに：前期福澤の到達点『民情一新』

1879年8月に刊行された『民情一新』は、チェインバース社叢書、ウェイランド、ミル、バックル、ギゾー、その他の書籍の翻訳・翻案を通して福澤が得た知識を自己の思想内に取り込み、日本の文脈で思想化したもので、啓蒙思想家としての福澤の思想を簡潔に叙述した理論的到達点である⁽⁸²⁾。

『民情一新』は、福澤が、もはや翻訳にたよることなく、約1ヵ月弱のあいだにはじめて自分の言葉だけで一気に書き下ろした⁽⁸³⁾独創性をもつ自信作で、「外国人をして日本国之事情を知らしめ、日本学士の思想を示す」ために、英訳出版も視野にいれていた⁽⁸⁴⁾。ここには、儒学からはじまり蘭学・英学を通して習得した福澤の「文明」や「文明開化」についての思想が凝縮されており、前期福澤の集大成の著作とってよい。『民情一新』は、『学問のすゝめ』や『文明論之概略』の奔放で情熱的な記述とは異なり、一步引いた醒めた眼で淡々と記述されており、そのために出版当時ほとんど注目されなかったことも理解できる。

福澤によれば、進歩（歴史）の原動力が機械の発明と技術革新にあり、「人間社会の運動力は蒸気に在りと云ふも可なり。千八百年は蒸気の時代なり、近時の文明は蒸気の文明なりと云ふも可なり」⁽⁸⁵⁾。19世紀の「文明の元素」「利器」としての「蒸気船車、電信、郵便、印刷」の発明工夫は、「凡そ其实用の最も広くして社会の全面に直接の影響を及ぼし、人類肉体の禍福のみならず其内部の精神を動かして智徳の有様をも一変し」、「結局、我社会は今後この利器と共に尚動て進むもの」である⁽⁸⁶⁾。この文明は「世界各国の民情に影響を及ぼして恰も斯民を一新し」⁽⁸⁷⁾、「恰も人間世界を転覆」するにまでいたっている⁽⁸⁸⁾。西洋人はみずから発明した蒸気の効用による「民情の変化」に「狼狽」し、「今日の西洋諸国は正に狼狽して方向に迷ふ者なり。他の狼狽する者を將て以て我方向の標準に供するは、狼狽の最も甚しき者に非ずや」として、もはや西洋を標準とするにはおよばない。したがって、福澤は、「此一新の実況

80 『文明論之概略』第9章『全集』第4巻、146、152～154頁。

81 福澤は、のちの『通俗民権論』および『通俗国権論』（1878年9月）において、「民権と国権とは正しく両立して分離す可らず」と強調し、日本において民権が伸長しない理由は人民の智徳の不足にあるとしている。福澤にとって、「民権」とは「私権」（市民的自由）と「政権」（政治的自由、すなわち参政権）を意味し、「自由」とは、文明の進歩をもたらすかどうかを基準で、福澤は、自由民権運動の「よしやシビルはまだ不自由でもポリチカルさえ自由なら」にみられるような政治主義的、権力的主義の傾向を「駄民権論」として批判した。

82 丸山眞男は、『民情一新』を「第一級の思想的著作」と評している（丸山『『文明論之概略』を読む』下、323頁）。『民情一新』における福澤の文明論についての視座の転換については、松沢『近代日本の形成と西洋経験』350～351頁を参照。

83 富田正文「後記」『福澤論吉選集』第4巻、岩波書店、1981年、357頁。福澤は、1879年5月28日に執筆を開始し、7月3日に脱稿した。この37日のうち、11日は執筆を休んでいるので、執筆期間は正味28日であったという。

84 1884年1月16日付福澤一太郎および捨次郎宛福澤論吉書簡『福澤論吉書簡集』第3巻、80頁。

85 『民情一新』緒言『全集』第5巻、7頁。

86 『民情一新』第3章『全集』第5巻、24、30頁。

87 『民情一新』緒言『全集』第5巻、10頁。

88 『民情一新』第5章『全集』第5巻、60頁。

に応じて事を処する者にして始て与に文明を語るべし。本編立論の旨は唯此一義に在るのみ」と述べ、文明論を科学技術の発展とその政治・経済・社会的影響に関連させて展開する⁽⁸⁹⁾。

『民情一新』の議論は、日本における国会開設は不可避であり、政権の多数派政党による平和的移譲など二大政党制にもとづく英国流議院制内閣制度（福澤の言葉では「英国の治風」）がもっとも望ましいという主張につらなっていくが、本書の趣旨は、科学技術の発展が、人間の政治・経済・社会に大きな影響をおよぼしてそれを一変させ、人間の制御が不可能になる文明社会の未来像を予知し、警鐘をならした点にある。

それにしても、本書の叙述に垣間みられる福澤の自信は、どこからくるのだろうか。それは、おそらく廃藩置県以降の日本の急速な政治・経済における西洋化の進展と、福澤自身が、『文明論之概略』刊行以降も引きつづきミル、スペンサー、トクヴィルなどの西欧の代表的著作を精読するなかで⁽⁹⁰⁾、西洋社会との比較を通して、日本の文明と日本の国家的独立に関して確信をもつにいたったことにあるように思われる。

(すぎやま しんや 慶應義塾大学名誉教授)

89 『民情一新』第3章『全集』第5巻、8、10頁。

90 安西敏三『福沢諭吉と西欧思想』名古屋大学出版会、1995年、7～8頁。